

玉泉院永姫に関する一史料と発給文書

石野 友康

はじめに

金沢城の西側、現在は道路となっている堀をはさんで尾山神社の東に位置するのは玉泉院丸と称する曲輪で、藩政期に庭園があったことでも知られる。平成27年春、暫定整備のもと庭園が復元され、新たな観光スポットとして期待されている。言うまでもなく、玉泉院丸は、玉泉院（永姫、2代藩主前田利長正室、織田信長娘、以下特に断らない限り玉泉院で統一したい）の名にちなむ曲輪であった。この曲輪はもともと西ノ丸と称し、藩祖利家の時代から江戸初期にかけては村井長頼はじめ重臣の屋敷がおかれていた。慶長19年（1614）に二代藩主利長が越中高岡で没すると、その正室永姫は落飾して玉泉院の法号を用いるとともに、その年金沢へ移り、元和9年に没するまでここを生活の場としたというのが通説となっている。

彼女自身の生涯は、史料的な制約もあって詳細は不明である。『石川県史』をみても⁽¹⁾簡単な紹介に留まっている。近年、宇佐美孝氏により金石中山家文書のなかの玉泉院関係史料の検討がなされ⁽²⁾や玉泉院に関する見瀬和雄氏による講演資料⁽³⁾は手元にあるが、彼女の足跡を藩政のなかにどのように位置づけていくかは今後の調査研究に委ねられている。

拙稿では、従来金沢城の玉泉院の御座所築造と移徙を慶長19年と理解されてきたが、御座所の築造については元和元年以降であることを指摘するとともに、彼女に関する基礎データの充実を図るべく52点におよぶ発給文書の特徴について述べていきたい。

1. 「本藩歴譜」にみる玉泉院の記憶

まずは、後年の加賀藩の記録によって玉泉院について藩政期を通じてどのように記載され伝えられてきたのかを振り返りたい。

江戸後期に書かれ、その後書き継がれた「本藩歴譜」⁽⁴⁾は藩主前田家の当主・子女・正室や側室等の略歴を示したものであり、江戸後期における大方の見方といえよう。玉泉院については次のように記されている。概要を示してみる。

玉泉院は永姫といい、織田信長の四女として誕生した。天正八年に前田利長との縁組の命を受け、その翌年越前府中に来嫁した。利長の死後剃髪して院号を称して高岡から金沢に帰った。当初金沢城新丸の横山長知宅に入り、ついで8月に新しく築造した西ノ丸に移った。このとき玉泉院丸と称した。八月に立山姥堂に参詣、元和9年2月に50歳で没し野田山に葬った（法号は玉泉院殿松厳永寿大姉）。

あわせて参考事項として玉泉寺の建立過程や玉泉院の生母の系譜や金沢堀川久昌寺の由緒などについて玉泉院との関わりのなかから触れられ、『石川県史』もこの記述に拠っている。

これらが今日の通説となっている。玉泉院は元和9年（1623）、50歳で没したというから、天正2年（1574）の生まれで、輿入れは8歳でのことであった。生母は生駒氏と伝え、元和4年3月没したという女性であった（法号は春譽妙証大姉）。この生駒氏は、信忠・信雄の生母（生駒蔵人家宗娘）とは別家の人だという。また、金沢堀川町に所在する久昌寺は、信長の菩提を弔うために尾張において慶長15年に明岩首座を開基として建立したものであり、のちに金沢に移したものと紹介している。明岩首座は信長の末孫と伝え、とすれば玉泉院にとっては近い一族であり、玉泉院が薨去したのち剃髪したという。

もう1つ、「本藩歴譜」には記されていないが、幼少時の玉泉院のエピソードを語るものが加賀藩の伝承のなかにある。本能寺の変のときの様子である。ちょうど本能寺の変の際に利長は幼少の玉泉院をともない、信長に会うために上洛の途中であったという。近江瀬田あたりで信長の急死の情報を

得、利長は直ちに玉泉院を前田家の旧領尾張荒子に逃し自らは事態に対応したという。

このように玉泉院に関わる記憶は、おそくとも幕末期には断片的になっていたのであり、それを結びつけながら彼女の人物像にせまらなくてはならないという課題がある。とくに金沢に住むようになってからの状況については、現状では伝承が伝わらない。

2. 金沢城での玉泉院

(1) 金沢移徙をめぐる一史料

玉泉院が金沢城へ移るに際しての一史料があるので確認したい。

山城かた迄之書状令披見候、何茂書中之通尤候、弥留守中用所之義共無滞様二可被申付候事尤候、

一、芳春院御屋敷廻普請并御座所作事出来候様二可被申付候、然八小松・大正寺之者共 并金沢留守有之衆役之三ヶ二之分出候様二申触候尤二候、奉行之儀八最前申付候も共其地二差下候条、急度可精入旨可被申渡候、毎日人数着到書付我々罷歸候刻可指上候 由可被申付候事、

一、玉泉院御座所之事、高岡のおうゑ・長屋をこほち候て舟二て宮腰へ相届候様可被申付候、普請之者之事、魚津之者とも岡嶋備中ものも三ヶ二之分出候様可申付候□ □

一、□ □ 可申付候□ □もの共□ □芳春□ □普請□
□ 申付候、何茂油断有間敷候、謹言、

筑前守

六月八日

利光（花押影）

奥村備後守殿

（加越能文庫「御歴代御書写」一）

「御歴代御書写」（金沢市立玉川図書館〔加越能文庫〕蔵）⁽⁵⁾は、明治期前田家編輯方で作成された写本で3冊存する。藩主利光（利常）が奥村備後守にあてた書状である。利光の花押をきわめ正確に描いているところからみて、現在原本の所蔵先は不明であるが、原本を確認している可能性がきわめて高い。宛名の奥村備後守については、奥村永福の子易英が備後守を名乗った形跡があるから⁽⁶⁾彼に比定できよう。

本文書は高岡城の沿革にも深く関わることから、高岡市『高岡城跡詳細調査報告書』（2013年）にも採られているが、玉泉院に関わる部分のみの抄出であった。金沢城の歴史にとっても重要な内容をもっている。

年代を推定してみよう。書状形式であり、年代は記されていない。内容から利長が没して永姫が玉泉院を名乗る慶長19年以降、芳春院が没する元和3年以前のものとしなくてはならないだろう。追記に「山城かた迄書状令披見候、何茂書中之通尤候、弥留守中用所之義共無滞様二可被申付候事尤候、」との文言から利常の側に山城＝横山長知がいること、奥村易英と利常とが離れている状態であることが明かである易英が「留守中用所之儀共」を命ぜられていることもあわせみると、長没直後の慶長19年のこととするのは難しい。

慶長19年6月といえば、長知は利常の叱責をうけて菩提寺松山寺にこもって剃髪して道哲を名乗り、ついで山城山科に移り夕庵と称したところである。帰藩するのはこの年の10月のことであり、大坂冬の陣の際には金沢の守衛にあたっていたことがわかっている。したがって利常に同行し大坂城めには参加していない。利常が金沢へいったん戻るのは翌元和元年2月6日のことで、2ヶ月後の4月18日には再度大坂に向けて出陣している。長知は大坂夏の陣には利常に従軍しており、その時の様子が諸記録のなかにみることができる。5月7日の大坂城落城後の様子に注目すれば、6月2日付で宝幢寺に対して発給した書面では、文面より長知は利常のもとにあり、利常が7月中に帰陣するであろうと報じており⁽⁷⁾、実際この年、元和元年6月8日段階では長知は利常とともに金沢にはいない状況であっ

たとえる。なお利常はこの8月に凱旋している⁽⁸⁾。ついで元和2年、3年の利常や長知、易英の動きについては不明な部分が多い。元和2年3月利常は、体調を崩した徳川家康を見舞うためか駿府に到ったとされ⁽⁹⁾、その後いつ金沢に戻ったかはわからない。翌3年は5月に、將軍秀忠の御成があり、利常の在府が確認できるが⁽¹⁰⁾、その後の動きについても今後明らかにしていかななくてはならない。このように考えていくと本史料は慶長19年である可能性は低く、元和元年から3年の間のものであったとみるのが妥当であろう。

「玉泉院御座所」については、「高岡のおう系・長屋をこほし候て舟にて宮腰へ相届候様二可被申候」とあるように「高岡のおう系・長屋」を解体して高岡から海路宮腰へ廻漕するよう命ぜられ、いで金沢城に移築するよう指示をだされていた。この工事については、芳春院の屋敷は「小松・大聖寺之者共并金沢留守有之衆」の役の3分2分が出役しており、玉泉院の普請には「魚津之者とも并岡嶋備中もの」も3分2の分が出役を命ぜられている。

玉泉院は利長の死により慶長19年に金沢へ至り横山邸に入ったものの、少なくとも1～3年間は長知留守宅にそのまま住まいし、元和初頭に高岡より御座所を移築したのち玉泉院丸に移った可能性がきわめて高いのである。玉泉院とほぼ同時に帰国した芳春院の屋敷廻りや御座所の作事にても帰国から1～3年経ってしままだ竣工していなかった状況であったことがわかる。

(2) 三人の女性たち

以上のように玉泉院や芳春院の城内の新屋敷は元和初頭以降に竣工し、それぞれこれに移った。すでに金沢城には利常の正室珠姫(子々姫)⁽¹¹⁾が存し『三壺聞書』の記事より推して本丸の御殿に住していたようであるから、歴代三代の当主の正室たちが金沢城に揃ったことになる。このうち芳春院については、利長の死をうけて利常生母である寿福院と交替する形で国許に戻った。『三壺聞書』によれば、彼女が江戸を発したのは慶長19年6月上旬のことであり、利長の死に目には会えなかった。その月の中旬には越中高岡に入り、10日ほど滞在して金沢にむかったという。金沢に到着した彼女は一旦金沢城の本丸に入り、その間に二ノ丸に御屋形をあらたに造営して8月に新宅に入ったとされるのであるが、先に見たように、芳春院屋敷廻りはいまだ進められている段階だから、8月とするならば元和初頭のこととしてとらえなければならない。いずれにしても

本丸	珠姫(三代利常正室)(慶長6年～元和8年)
二ノ丸	芳春院(初代利家正室)(元和初頭～元和3年)
玉泉院丸	玉泉院(二代利長正室)(元和初頭～元和9年)

の図式ができあがった。慶長19年以來(本丸・二ノ丸・西ノ丸の配置としては元和初頭)元和3年までの数年間はこの三人が金沢城に住したことになる。芳春院が元和3年に没し、元和8、9年に残る珠姫、玉泉院も次々没するが、この三人そろって金沢城に存在したことがこの時期の藩政や金沢城の変遷のなかでどのような意味を持つのかについては注目されておらず、今後明らかにしていく必要があるのではないかと考える。今後の課題としたい。なお、利家の娘で宇喜多秀家室の豪姫も城にほど近い西丁に住居するようになったというから⁽¹⁰⁾、女性たちが城もしくは近隣に揃ったことになり、あわせて考えるべきだと考える。

3. 玉泉院文書の検討

(1) 概要

次に玉泉院文書についてみていきたい。表1は52点の一覧である。玉泉院文書と言っても芳春院のように自身による消息はほとんどみられない。豎紙の日下に印を据えていながらも、その大半が小太夫・千福・宰相などといった侍女たちの名で発給された。その大半は無年記であり、年記が確定できるものは数点しかない。宛先は妙泰寺・埴生八幡宮・立山岩峯寺など加賀・能登・越中の寺社を中心にしながら、加賀宮腰の町年寄を勤めた中山家や越前大文字屋そして玉泉院附で高岡町支配の任に

あったとされる鈴木権介・杉山小助らに充てられている。内容をみていくと、玉泉院の知行所大衆免村のうちで妙泰寺に寄進する内容のものもあるが（整理番号2史料）、そのほかには献上物に対する礼状の類が大半であり、礼状の類でも「玉泉院」との文字があれば慶長19年以降のものと判明し、5月20日に没しているのも、5月20日以前の日付であれば慶長20年=元和元年以降のものと年代の幅が狭まってくるのである。しかし、それすら判らず手がかりがつかめないものが大多数である。彼女が藩政そのものに関与したり、感情を吐露したものはほとんどみられない。したがってここから彼女の人物像なり藩政における役割などを直接引き出すことは残念ながら難しい。

（2）発給文書編年化の課題

問題は、こうした現状ではあるが何とかこれらの文書の編年化はできないかという点であろう。宇佐美氏は、中山家文書を素材とし、上書きに記された人物等に注目して差出人と宛所を手がかりに編年化を試みられておられる。玉泉院の侍女である千福が利長在世中より名がみえるとして比較的初期のものとされ、小太夫が元和頃に登場することから後半期のものと推測された。しかし、表1をみてわかるように、慶長17年のものと推定されるものに小太夫の名で発給するものがあり、利長在世中からすでに活躍が確認できる。また、元和元年には小太夫と連署する形で千福が発給していて、前期・後期を想定するほどの分類はできない。侍女は小太夫・千福、さい・たつ、千福・宰相という3通りの組み合わせが確認でき、それぞれ単独でも発給をみる。連署と単独発給での意味の違い、そもそも、小太夫や千福、宰相等の由緒についても不明である。

ところで侍女たちに関しては、慶長11年7月の白山太神宮の奉加帳に記載されている（表2）⁽¹³⁾。本文書は、森田平次（柿園）「国事雑抄」⁽¹⁴⁾にも取り上げられているものである。28名の女性のうち、さい・たつ、せんふく・さいしやう・しん太夫は発給文書に登場する人物と一致し、しん太夫については、中山家文書のなかにも現れており、これらが利長や玉泉院附の女性たちと考えられる。ただし、この奉加帳には小太夫の名がみえない。あるいは、慶長11年から17年の間に利長が玉泉院に近侍する立場となったか、この間に改名したことも想定しなくてはならないし、あらたに召し抱えられた可能性も捨てきれない。侍女たちの発給からの編年化にはより慎重な検討が必要であろう。

また、玉泉院の印文も一様であって年代推定への決め手に欠ける。このように編年化の作業は、現段階では一筋縄ではいかない作業といわざるをえないのである。

（3）寺社由緒帳の記述

さて、日本海文化叢書『加越能寺社由来』（上下巻2冊）には、加賀・能登・越中あるいは預地に所在する江戸時代の寺社由緒帳や明治期に作成された明細書などが所収されている。その上巻には延宝・貞享という江戸前期に各寺社が宗派ごとに藩に提出した由緒帳を所収している。藩の寺社改めにおいて書き上げられたものであった。このうち延宝期の社寺来歴は前田氏一門の菩提所・祈祷所・外護所として藩の特別保護を受けていた寺社を対象に行われ、貞享の由緒帳は、すべての寺社を対象に提出を求められたもので、その後の寺社の基本台帳としての役割をもったと指摘されている。新規寺社の建立禁止にともない新規での寺社身分に加わることは難しくなった⁽¹⁵⁾。

以上は、いわば藩支配者層からの評価であるが、一方寺社側からすれば、自分たちの寺社の来歴を書き上げるということは藩との関係を意識しながら、その伝承を由緒帳に反映させたわけで、玉泉院のこともストレートにうかがうことができよう。玉泉院のことがみえる寺社としては玉泉寺（時宗）はじめ妙泰寺（日蓮宗）、久昌寺（曹洞宗、前述）、越中三光寺（曹洞宗）、立山芦峯寺・中宮姥堂（天台宗）・埴生八幡宮などがあげられる。そこに記される玉泉院の足跡としては、屋敷地の拝領 拝殿や室堂などの施設の建立 常々の祈祷などがあげられる。

このなかで越中埴生八幡宮の由緒では、大坂の陣の際、家康・秀忠、利常の武運長久の祈祷を天徳院より依頼され、神主民部が秀忠に札守や木曾義仲願書・矢柄を摂津の陣所に持参した。そのことを

玉泉院へ千福・宰相を通して申し上げたという。いわば先にみた千福・宰相が取次としての役割も担っている点に注目したい。大坂の陣は冬の陣であれ、翌年の夏の陣であれ玉泉院は金沢城にて前田家の活躍を見守っていたが、諸事の連絡は侍女達を通して耳にし、必要があれば彼女たちを通して対応したことになる。ここでも玉泉院の姿は見えない。

〔表1〕 玉泉院関連文書一覧

	年代		差出人	宛先	内容	所属	請求番号等	備考（刊行物）
1	（慶長17年か）	12月24日	小太夫	三くわう寺	屋敷扶持の御礼にくしがき進上御礼	玉川（加越能） 加能越古文叢 50	16.03-4	屋敷扶持は慶長17年のこと（『加能寺社由来』294頁
2	元和元年	9月15日	小太夫・千福	妙泰寺	玉泉院知行所大衆免村内の屋敷地寄進	妙泰寺文書		「印」あり。『金沢市史』寺社
3	（元和6年）	閏極月7日	小太夫	塙生神主民部	歳暮祈念御礼に尺餅・昆布献上につき書状	加藩国初遺文 11	16.28-74	「御印」とあり
4	元和7年	10月15日	さい・たつ	能州霊泉寺いんきよ東堂	霊泉寺寺屋敷寄進に付印判状	松雲公採集遺 編類纂130	16.03-1 （130）	『新修七尾市史』寺社編11頁
5		巳3月13日	小太夫	すす木・小介	ならぶ進上につき	中山家文書	160-22	宇佐美1986
6		正月5日	小太夫	鈴木権介	年頭御礼として小鯛・かながしら進上につ き	中山家文書	160-16	宇佐美1986
7		5月4日	小太夫	鈴木権介	見舞としてこういか進上につき	中山家文書	160-25	宇佐美1986
8		正月6日	小太夫	宮腰主計	年頭御礼として昆布・海鼠腸進上	中山家文書	160-17	宇佐美1986
9		正月7日	小太夫・千福	越中稲荷神主豊後	年頭御礼として巻数御礼守到来礼状	高岡神社神官 関氏所蔵		「加賀藩史料」（稿 本）元和8・9年
10		正月9日	しん大夫	こさへもん	かみ様へくしこ等進上につき礼状	中山家文書		
11		正月12日	小太夫・千福	岩倉 延命院	伊勢へ年籠にて御被・熨斗・黒海苔献上に つき礼状	岩崎寺文書		「黒印」あり。『越 中立山古文書』174 頁
12		正月13日	小太夫・千福	杉山小助・鈴木権介・ 谷五兵衛	年頭御礼として昆布・鮓進上につき	中山家文書	160-11	宇佐美1986
13		正月17日	千福・小太夫	青木・小助	大文字屋帰るにつき、玉泉院より祝儀遣わ す	加藩国初遺文 11	16.28-74 （12）	玉泉院の印影あり
14		正月19日	（印影）	（欠）	年頭御礼奉書5束・大栗等到来礼状	松雲公採集遺 編類纂139	16.03-1	玉泉院の命を奉じて 女中が発給か
15		正月19日	小太夫	勝興寺	鳥目100疋進上の礼状	勝興寺文書		『雲龍山勝興寺古文 書集』
16		正月29日	千福・宰相	塙生別当	年頭祝儀として巻数・そなへ物・串柿献上 につき礼状	加藩国初遺文 11	16.28-74 （12）	「御印」あり
17		2月4日	（欠）	（欠）	年頭御礼として札・樽等進上御礼	玉川（郷土）	k 1-362	
18		2月5日	宰相	鈴木権介	年頭としてかぶ進上につき	中山家文書	160-21	宇佐美1986
19		2月15日	せんふく	いせこと 豊後	せきの郷神めい辺茅の窪地を神領とすべき を伝える	高岡神社神官 関氏所蔵		玉泉院と思われる印 あり。『加賀藩史料』 （稿本）元和8・9年
20		2月21日	小太夫	杉山小助・鈴木権介	かながしら進上につき	中山家文書	160-20	宇佐美1986
21		3月17日	小太夫	宮腰主計	鯛進上	中山家文書	160-23	宇佐美1986
22		3月29日	小太夫	宮腰主計	音信としてほうぼう・こち進上につき	中山家文書	160-24	宇佐美1986
23	（慶長20年以降）	卯月19日	千福	いわくら延命院	玉泉院への巻数・葛粉御礼	岩崎寺文書		「黒印」あり『越中 立山古文書』169頁
24		5月7日	小太夫・千福	稲荷神主豊後	利波・射水・中郡村々宮初穂田米仰せ付け られ國中勤行を求める	高岡神社神官 関氏所蔵		「加賀藩史料」（稿 本）元和8・9年、 「印」あり
25		5月8日	小太夫	はにう神主	当月祈念に昆布等献上につき礼状	加藩国初遺文 11	16.28-74	「御印」とあり
26		5月11日	小太夫・千福	能州石動山火之宮坊	当月祈念札・昆布到来礼状	玉川（郷土）	k 1-364	
27		5月19日	小太夫	いなり神主 豊後	山のいも・野老・串柿到来礼状	高岡神社神官 関氏所蔵		「加賀藩史料」（稿 本）元和8・9年
28	（慶長20年以降）	5月19日	せんふく	一のみや大くうし	きくせんいんさま（玉泉院様力）への札・ 肴献上の礼状	気多神社文書		『気多神社文書 第 一』
29	（慶長19年以降）	5月25日	千福	岩倉延命院	伊勢よりの下向につき被・熨斗等玉泉院へ 献上につき礼状	岩崎寺文書		「黒印」あり『越中 立山古文書』169頁
30		6月3日	せんふく	いわくら ゑんめい いん	あらたに戸帳をつかわしたるにつき、すで につかわしている戸帳返却を	岩崎寺文書		『越中立山古文書』 170頁
31		6月13日	小太夫・千福	岩倉 座主坊	巻数・御供・御神酒等進上につき礼状	岩崎寺文書		「黒印」あり。『越 中立山古文書』174 頁
32		6月16日	小太夫	鈴木権介	御礼として小鯛進上につき	中山家文書	160-26	宇佐美1986
33		7月7日	千福・小太夫	杉山小助・鈴木権介	七夕礼として蛤・ささげ進上につき	中山家文書	160-27	宇佐美1986
34		7月10日	千福・宰相	杉山小助・鈴木権介	御見舞としてきず進上につき	中山家文書	160-28	宇佐美1986
35	（慶長19年以降）	7月11日	せんふく	ゑんめんいんのてし やくれん	玉泉院に結分経献上につき銀3匁下賜方 案内	岩崎寺文書		「黒印」あり。『越 中立山古文書』170 頁
36		7月14日	小太夫	鈴木権介	盆礼としてこつくら進上につき	中山家文書	160-29	宇佐美1986
37		7月26日	さいしやう	いわくら さす	札・巻数折・樽献上につき礼状	岩崎寺文書		「黒印」あり。『越 中立山古文書』172 頁

38		8月4日	せんふく	すゝき・五ひやうへ・かひやうへ・太郎へもん	いわくら三人の衆より御影・御札・午王献上につき初穂遣わず旨案内	岩峯寺文書		「黒印」あり。『越中立山古文書』170頁
39		8月7日	せんふく	小さえもん・七さへもん	うえさまより府中の大文字屋に銀子を遣わされた旨案内	松雲公採集遺編類纂139		
40		8月8日	さい将	すゝき・五ひやうへ	いわくら座主・新發意より桃・御札等到来につき消息	岩峯寺文書		「黒印」あり。『越中立山古文書』173頁
41		8月8日	さい将	いわくらのさすの御はう	上さまの寄進として書付遣わず儀につき消息（前後欠）	岩峯寺文書		「黒印」あり。『越中立山古文書』174頁
42	（慶長19年以降）	8月16日	せんふく	糸んくわうはう	祈祷し御巻数・供物・洗米を玉泉院へ献上につき消息	岩峯寺文書		「黒印」あり。『越中立山古文書』172頁
43		8月19日	小太夫	立山別当	祈祷の御札巻数・梨到来につき礼状	岩峯寺文書		「黒印」あり。『越中立山古文書』174頁
44		9月9日	千福・小太夫	杉山小助・鈴木権介	御札として蛤進上につき	中山家文書	160-33	宇佐美1986
45		9月14日	小太夫・千福	埴生神主民部	祈祷御札に尺餅・昆布献上につき書状	加藩国初遺文11	16.28-74（12）	「御印」とあり
46	（慶長19年以降）	9月24日	小太夫	糸ちせん大もんしや	玉泉院様よりの返事発給につき消息	加藩国初遺文11	16.28-74（12）	
47		10月2日	さい・たつ	宮腰主計	御札として昆布進上につき	中山家文書	160-31	宇佐美1986
48		10月11日	せんふく	かんぬし ふんこ	狩衣御礼のこと等伝える	高岡神社神官関氏所蔵		「加賀藩史料」（稿本）、「印」あり
49		霜月24日	さい・たつ	二上さす 宝蔵坊・本覚坊	寺屋敷検地帳に除かれ、よき事と伝える	射水郡二山元養老寺所蔵		「加賀藩史料」（稿本）、「玉泉夫人御印」とあり、ほぼ同文の二上たんき所あてのものあり
50		12月25日	小太夫	杉山小助・鈴木権介	歳暮礼としてかに進上につき	中山家文書	160-32	宇佐美1986
51		12月26日	千福・宰相	いはくら惣坊	歳暮の祝儀として巻数・串柿献上につき礼状	岩峯寺文書		「黒印」あり。『越中立山古文書』172頁
52		（欠）	せんふく	（欠）	ことひき献上の礼状	中山家文書		

〔表2〕 慶長11年7月白山太神宮奉加帳

	人名
銀子2枚	ひ
5石	宮
10匁	さい
10匁	きく
10匁	あちや
10匁	さな
5匁	たつ
5匁	かめ
5匁	いち
5匁	とく
5匁	こ五
10文目（匁か）	しん大夫
5文目（匁か）	せんふく
3文目（匁か）	せうしやう
3文目（匁か）	さいしやう
3文目（匁か）	あい
3文目（匁か）	おちよほ
3文目（匁か）	まき
3文目（匁か）	五い
2文目（匁か）	きやく
2文目（匁か）	こしゝう
2文目（匁か）	はるちうしやう
2文目（匁か）	あこ

2文目（刃か）	おい
2文目（刃か）	紅い
3文目（刃か）	あちやこ
2文目（刃か）	やと
2文目（刃か）	たま
2刃	ちやあ
1刃	おちま
2刃	いちや
200文御あし	ふく
1刃	きい
5石	（9月23日）ひかしの丸御うへ(寿福院か)
20目	おちの人さま
20目	うへのさま（天徳院か）
1刃	御女房衆

加越能文庫「白山太神宮奉加帳写」より作成
*ゴチックは奉書に名が見える人物

おわりにかえて

以上、西ノ丸（玉泉院丸）における玉泉院の御座所が高岡より移築されたのは元和初頭のことであることを指摘するとともに、玉泉院の発給文書についても収集につとめた。彼女の文書を見る限り政治的な動きをみせず、そのうえ、発給はその侍女たちの名においてなされ、内容も礼状の類が大半であったから、拙稿においてもこれまでの見解を反芻的に確認するにとどまってしまったのは残念であった。しかし、逆に寺社関係の文書に彼女の足跡を見いだすことができたのは、むしろ象徴的であった。

彼女ゆかりの人について目を転ずると、見瀬和雄氏は玉泉院の養子女になった人物について注目されているが⁽¹⁶⁾、いま一度列記してみると、

〔養子〕

- ・前田利政
- ・前田利常

〔養女〕

- ・【利長 養】利家娘豪姫の娘 藩士山崎長郷室のち富田重家室
- ・【利長 養】重臣長連龍妹もしくは娘 前田直知室
- ・【利長 養】牧村利貞娘 前田直知室のち町野幸和室（祖心）
- ・【利長 養】寺西九兵衛娘 藩士青山吉次室
- ・【玉泉院 養】織田信雄娘 藩士生駒直勝⁽¹⁷⁾室
- ・【玉泉院 養】（実父不詳） 藩士高畠定方室

となる。男子では利政・利常が養子となっており、いずれ藩主後継候補もしくは、後継のためのものであった。女子をみると、記録では「利長養」と「玉泉院養」と二様あるのがわかる。おそらくは、「利長養」とは、利長在世中の慶長19年までに養女となった人物、「玉泉院養」とは利長死後、玉泉院の養女になった人物だとみられる。祖心のように江戸城の大奥で著名な人物もいるが、これを除けば養女たちはいずれも藩の重臣層に嫁し、婚家を通して藩主家を支えた。

また、藩内に織田一族の足跡を認めることができる。茶人として著名な織田有楽斎の二男河内守長孝が利常に仕え、その子孫が人持組の藩士として命脈を保ったのも、玉泉院の兄信雄の五男高長が利常のもとに寄住して大坂夏の陣に参陣し、その子長頼が加賀国生まれであったとする伝承（『寛政重修諸家譜』）などはやはり織田氏を出自とする彼女の存在を抜きにして考えるわけにはいかない。

今後は、こうした人的なつながりの面にも配意し、彼女の足跡が伺えないか検討していきたい。

〔註〕

- (1) 『石川県史』第貳編(1939年発行、1974年復刻) 196頁
- (2) 宇佐美孝「利長室玉泉院文書について」(『加能史料研究』第2号 1986)。このなかで、宇佐美氏は中山家文書に残されている玉泉院文書16点について検討をおこなっている。
- (3) 見瀬和雄「玉泉院と玉泉院丸」(金沢学院大学歴史文化学科公開講座資料 2013)このなかで、史料の少ない玉泉院の実像について、藩政の関わりのなかから検討を加えられ、発給文書に関しては、中山家文書や『越中立山古文書』、高岡市立博物館図録『前田利長展』を参考に34点の関連文書の収集につとめられている。
- (4) 公益財団法人前田育徳会蔵に原本が所蔵され、金沢市立玉川図書館にはその写本(請求番号16.11-44)が残されている。なお、本史料は『金沢市史』資料編3 近世1に収載しており、これに拠った。
- (5) 請求番号16.17-7。なお、本史料の所在については、横山方子氏の御教示による。
- (6) 加越能文庫「諸士系譜」(請求番号16.31-49)四など
- (7) 「国初遺文」(『加賀藩史料』2、元和元年6月21日条)。本史料の原本は「加藩国初遺文」として加越能文庫架蔵
- (8) 「本藩歴譜」では、7月18日に家康より帰国の命がでたといい、8月15日もしくは25日に帰城したとする。
- (9) 「本藩歴譜」の記述による。
- (10) 元和3年の御成については、『加賀藩史料』のほか、『本光国師日記』(『大日本協教全書』140 大法輪閣)、「東武実録」(『内閣文庫所蔵史籍業刊 81』)などにみえる。
- (12) 「本藩歴譜」では夫である宇喜多秀家が八丈島に流されたあと加州に戻り化粧田1500石を得て金沢西丁に居住したと伝承する。
- (13) 白山太神宮奉加帳については、加越能文庫に写本があり(請求番号16.61-268)、これに拠った。
- (14) 「国事雑抄」は加越能文庫などにも存し、石川県図書館協会より翻刻され刊行されている。
- (15) 『加能越寺社由来』解題(室山孝氏執筆)と解説(「加賀藩の寺社改め」大桑斉氏執筆)。
- (16) 註(3) 参照
- (17) 生駒直義(内膳)の父直勝(内膳)は、芳春院に付き従い、慶長十九年五月に江戸で亡くなったことでも知られている。金沢市立玉川図書館所蔵の享和3年「系図帳」(請求番号090-1010(6))によれば、直勝は実は信長の末子と伝え、とすれば玉泉院や信雄とは兄弟ということになる。